

アトモスフィア

意見と思いつき*

吉田賢右**

競争は無条件にいいものか。

近頃、研究以外のことが忙しすぎる。ある一定の資源があり、それをどう分けるか。等しく分けるなんてとんでもない、競争によって重点的に分けるのが当たり前だろう、というのが最近の風潮である。しかし、競争そのものにも相当のコストがかかることを忘れていて、競争が激しくなればなるほど、そのコストは膨大になる。観光客を地方に呼び込もうと地域興しとか称して、あれこれ金を使う。しかし、全国の地方がこれをやれば、(観光客が一定なら)結局同じである。法人化以降の大学の差別化や研究費重点配分などの競争もいいかげんにしないと、全体が疲れただけ、ということになる。

「可能性」コメントのまやかし

科学の発見を伝える新聞記事やテレビのニュースで、発見者が「これはガンの治療に役立つ可能性がある」などというコメントを述べるのがよくある。これは無責任なコメントである。もし可能性を言うなら、実際どれくらい実現可能なのか、専門家としての見識をかけて述べて欲しい。10%の可能性と0.001%の可能性では全く意味が違う。可能性が全くない、という証明は難しい。だからといって、一般の素人(および行政)向けに「可能性がある」というコメントを乱発するのは真面目な態度ではない。

科学の発展段階と研究費

当たり前のことだが、いくら研究費を注いでもできないことがある。例えば、肉親が進行性のガンになれば、もっと科学が進歩してガンをなおせないか、と誰しも思う。そこで、政治家がガンの研究費を倍増するといえば、それは無条件に結構なことだ、となる。しかし、ガンの原因治療はプロジェクトX(既存の知識と技術を有効に組織し工夫奮闘して目的を達成する)で実現できる発展段階に達していない。したがって、いくら研究費をその限定された分野に重点的に注いでも目的は達成できない。むしろ、どこに突破口があるのかわからない段階では、幅広くいろんな分野に研究費をばらまくことが必要である。政治家は(そして一般の人も)それがわからない。科学者は、自分の分野に研究資金が流れ込む誘惑に抗して、専門家としてこの事情を指摘する責任がある。

専門家の責任

だいぶ前の話だが、研究室で「気」と称する超能力の議論が昂じたあげく、ついに、テレビにも出ていたという「気」の名人に研究室まで来てもらって立ち会いの実験をすることになった。いい機会だと思ったので、私は近隣の教授助教も呼び集めた。注視の中で名人は人差し指の先から「気」を発し、こちらの注文に従って、大腸菌を瞬時に殺菌あるいは倍化した……が翌日プレートには何も異常は起きていなかった。世間には、手品を超能力と称する人があり、またいろんなおかしなことを売り物にしている商品がある。これに対して専門家として発言するのも、科学者の責任の一つだろう。

スーパーシニア研究費

もったいない、と言えば、有能で生産的なシニア研究者が定年で引退するのは、もったいない。そういう人が教育研究の「長」のつく行政職につくことも多い。しかし、それに向かない、あるいはやりたくない人もいる。こういう方にシニア研究費を提供して、自由に研究して頂くのはどうだろう。案外こんなところから真のブレークスルーが出現するかもしれない。規模は研究員2人程度、自分自身の給料も研究費から支出できて、研究場所も自由に設定出来る。範囲を少し広げて、定年5年前から応募できるとすれば、大学のポストも空いて新陳代謝も良くなる。採否の審査は過去30年間の実績を見れば簡単。以前、これをJSTの「さきがけ」から連想して「おそぎき」と提案したが、これでは年取るまで咲いたことがなかったように誤解される。そこで、「スーパーシニア」と称する。

発掘型の栄誉賞

ノーベル賞は、時に意外な人を発掘して栄誉を与え、話題となる。日本にもいろいろ科学者を対象とした賞があるが、既に権威のある人が授与されることが多い。それは「間違わない」という点ではいい。しかし、賞の選考委員会はたまには独自の見識を持って(賞の権威をかけて)、発掘の授賞をやってもいいのではないか。

*私たちの研究室のホームページ (<http://www.res.titech.ac.jp/~seibutu/home.html>) の私の自己紹介の頁に、上記意見のいくつかに関連する小稿があります。

**東京工業大学資源化学研究所